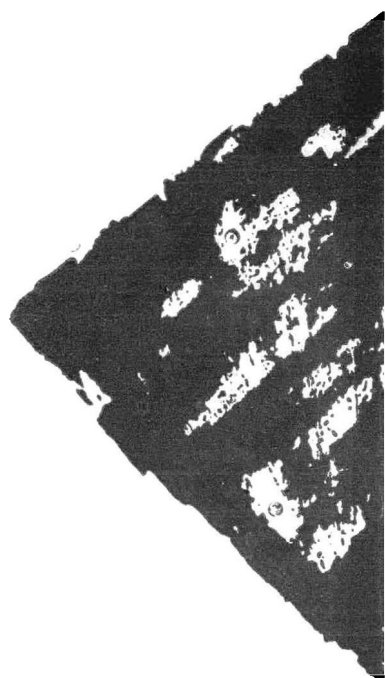


野
村
胡
堂

錢形平次捕物全集



25

河出書房新社

錢形平次捕物全集 25

昭和三十三年十二月二十日 初版印刷
昭和三十三年十二月二十五日 初版発行

定価 二九〇円

著者 野村 胡堂

発行者 河出 孝雄
東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 矢部 富三
東京都千代田区神田小川町二ノ四

発行所

株式
会社

河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ八
振替東京一〇八〇二番
電話東京(29) 三七一八

目

次

出世街道	一
お舟お丹	六
お綾の罪	一〇一
三人片輪	一二六
お町の働き	一三三
愚かしき娘	一四四
針妙の手柄	一五八
母と娘	一七三
恋の魅力	一八六
死の花嫁	二〇〇

お綱の罪……………二三

子攫い……………三六

父の秘密……………三八

叔母殺し……………三五

独り芝居……………三六

悲しき恋人……………三九

鼻斬り……………四一

殿様要女……………四三

醜い女……………四六



出世街道

十年目

一

田島屋総七は日本橋の上に二た刻もブラブラしておりま
した。朝から昼になって、やがて夕方も近づこうと言うの
に、十年前に約束した、加川祐三郎という若い浪人が、ど
うしたとか、姿を見せなかったのです。

それは今から十年前の箱根の山道でした。三島から登っ
て、あとひと息で小田原へ着こうという矢先に、総七は腹
痛を起こして道傍の藪陰に休んでいると、

「いかがめされた、旅の方」

そう言って、様子を尋ねてくれたのは、同じ旅姿の三島
から登って来た若い男でした。

「急に腹痛がいたして、ここに休んでおります。旅の方も
多勢通りますが、薄情なもので、声をかけて下さる方もあ
りません」

見ると旅人は身なりも賤しからず、人柄も穏かで、なんとなく組しやすく見えました。

「それはお気の毒」

武家風の男も、その前に坐りました。旅人も跡が絶え、ほかには憚る節もありません。

「なにか、合葉をお持ちでしょうか、私はなんにも用意いたしません」

町人風の男——後の総七は、旅の浪人にこういうことを言うほど困り抜いておりました。

「私の持薬でよかったら、喜んで差上げたいのだが、これは仙方万金丹と申して、あらゆる腹痛に神の如くききまします」

若い浪人者は印籠の中から、銀色の薬袋紙を取り出し、中から二つ錠剤を取り出してすすめました。

町人風の男は、それを押し頂くと、傍に流れる谷水を飲んで、一気に呑み下します。余程その腹痛には悩まされている様子です。

暫らくたちました。町人の腹痛はあとかたもなく消えうせて、半刻もたつと、笑いがその頬に浮かんで来ます。

「有難うございます、おかげ様で助かりました。もうなんの痛みもございません。長旅に喉が渇いてツイ谷川の水を呑み過ぎたのでございましょう」

「いやいや、旅は道づれ世はなさけと申します、こんな些細のことでお礼は痛みいります」

「なんの、見て見ぬふりに通られても文句の言いようはありません。旦那様のような方は、まったく地獄で仏に逢ったようなもので」

「いやいや、見ず知らずの人から薬を頂いて、すぐ呑んで見ようと言うのはよくよくのお困りで、かえって私の方から御礼を申上げたいくらいで」

「とんでもない」

こんなことから、旅の若い二人は身分をこえ懇意になりました。箱根八里の道、小田原までは近いと言ってもなかなかの道、すっかり打ちとけて話し合ったことです。

小田原の町へ入って、町人の方には、江戸から迎えが来ており、浪人の方はその晩の宿賃にも困る様子で、浪人者の方から遠慮をして別れることになりました。

「これでお別れいたします。私は加川祐三郎と申す、無縁の侍、いつかはまた江戸表にてお目にかかる折もありましょう」

浪人はつつましく小腰を屈めました。

「それは甚だ残念なことでございます。私は浅草の田島屋総左衛門の甥の総七と申します。叔父の危篤の報せを受けて、府中の在所から急いで参りました。そんなことで、迎

えの者もあり、旦那様とご一緒できないのが残念で」と町人の総七は言うのです。

二

「残り惜しいが、それではお別れしましょう」

浪人加川祐三郎は、惜し気もなく別れて立ち去ろうとした時でした。

「このままお別れするのは残念、それでは今から十年後の今月、今日、十月二十日でございますが、江戸で名題の日本橋の上で、お目にかかりましょう」

総七はこう言うのでした。日を定めて日本橋の上で再会する、それは劇的で面白い計画でした。江戸時代にはそんな事が流行ったもので、塙保己一も根岸肥前守もそんな事をしたと言う話があり、何年の何月何日に日本橋の上で逢って出世比べをしようと言った、子供らしい約束が、いたるところに取りかわされていたのです。

「それは面白いが、私は、天下無縁の浪人、召し抱えられないほどの腕もなく、良い叔父も叔母も持ち合わせません。十年後の今月今日は、橋の袖で話を唱てるかも知れませんが」

「なんの左様なことがあって良いものでしょうか、私こそ田島屋の甥には相違ありませんが、明日のことは一向にわ

かりません。これからさき一生懸命に働いて、田島屋の甥は、百姓の出ながら、見上げたものだと言われたい心持でいっぱいでございます」

二人の話は、わきで聞いていても気持ちの良いものでした。二人とも貧乏で、二人とも謙遜で、これからの楽しみのはかには、一つもない純良無垢な若者だったのです。

それから十年の歳月は流れました。

その間に、一度は助かって全快した田島屋総左衛門は、五年目には亡くなり、総七は甥ということのほか、商売も上手、人間も真面目なのを見込まれて、総左衛門の目がおねに叶い、娘のお栄と一緒に、跡取りに直され、先代の総左衛門を襲いで、田島屋の当主になりました。田島屋は浅草雷門前に店をかまえた、有名な薪炭問屋で、当時万両分限として、富裕の名が高かったのです。

総七はその店に坐って、いつの間にやら十年の月日は経ちました。箱根路で腹痛を起こしたことも、加川祐三郎という浪人の世話を受けたこともすっかり忘れ、十月二十日を無事に迎えたのです。総七の内儀お栄は二十七、眉の跡の青い、齒並みの黒々とした、非凡の年増でした。困ったことには子はなく、妹のお栄という十八になる美しいのを、自分の子のように育てております。

「お兄様、今日は十月の二十日、私はちよいと、出て参り

ますが」

お染はあどけなく首をかしげるのです。結い立ての島田髷が重そうで、盛装をこらすとなかなかの美しさです。

「今日は三座の芝居の看板が出る日ではないのか、若い女どもという者は、どうしてそう落着かないものだろう」

顔見世の看板は、女子供にとっては何よりの魅力だったのです。

「でも——」

お染は外出の支度をしたまま、入口にしなを作っており
ます。

「それに今日は町内の恵比寿講の祝いでもある、滅多に出られては困るが——いや、いや十月の二十日あれからちょうど十年目だ、そういう私もちよいと用事があるはずだ」

「あれ、そういうお兄様もお出かけなんで？」

「いや大事な用事を忘れていたよ、私は今日大変な用事があったのだ」

総七はこの時はじめて十年前の箱根路を思い出したので
す。

三

それから二た刻あまり、総七は日本橋あたりをブラブラ
しました。夥しく旅の武家は通りますが、曾て十年前、

箱根路で逢ったばかりですが、顔は刻みつけるようにハッキリ記憶しているはずの加川祐三郎らしいのは見えません。

総七は日本橋を渡りおえて、これを最後に雷門の家へ帰ろうとしました。考えて見ると、十年前の恩人に逢うことは、内儀にも打ち明けずに来たようです。打ち明けたら実際の、物事をハッキリきめてかかる女房のお染は「お前さんはまア、そんな約束をあてにして」と、一笑に付することでしょう。

総七はいよいよ帰ることに決めて、浅草の方へ足を向けました。少し急いだら、たいした遅れもせずに、恵比寿講の始まる前に店へ帰れるかも知れません。

二、三步踏み出したところで、

「あ、田島屋さんじゃございませんか」

不意に声をかけた者があります。振り返るとみすぼらしい浪人者、それは十年前に逢った、加川祐三郎のやつ果てた姿ではありませんか。

「これは加川様、もう諦めて帰りかけるところでした。まあまあ変わりもなく」

「やはり田島屋さん、それは良いところでお目にかかりました。十年前にお約束した日は、明日とばかり思い込んでおりました」

「とんでもない、十月の二十日は今日で」

「いえ、私は十月の二十一日とばかり覚えておりました、万々一の間違いもあってはと思い、本所の宿から駆けつけて、間に合いました」

そう言えば加川祐三郎は恐ろしく、この秋空に汗をかくております。十年という歳月を距てて逢う顔は、加川祐三郎も貧苦のやつれが目立って、そう思ってみなければちょっと見当はつかなかったでしょう。

「さアここでは話もなりません」

「一別以来、十年という日月は長ございました。相も変らぬ浪人暮しで、お恥かしいことですが」

「とんでもない、——ともかくお話を承りましょう。ここでは話もなりません、そう、私の家へ」

田島屋総七は先に立ちました。そこから浅草まで決して近い途ではありませんが、話しているうちに道ははかどって、夕方までには雷門の田島屋に着きます。

「おや」

「どうかありませんでしたか、田島屋さん」

「家の中がざわざわしているようで」

田島屋が立ち止ったのも無理はありません。雷門前の田島屋の店はこのとき思いも寄らぬ人ばかりです。

物々しい様子におどろいて、総七が駆け込むのと、番頭

の徳松という、薄汚の男が飛び出すのと一緒にでした。

「旦那、ちょうど良いところでした、お嬢さんが大変なことになるました」

「お嬢さん？」

「お染さんが殺されてしまったんです」

「なんだと？」

「お前さん、お染が殺されてしまいました。芝居の絵看板を見ているところを刺されたんですって、猿若町の御町内に知ってる方があって、家まで知らせてくれたので、いま運んで来たばかり」

後に続いたのは女房のお染、殺されたお染のためには肉親の姉で、息せき切って早口にまくし立てるのです。

「それは大変なことじゃないか」

総七は客を案内したことも忘れて家の中に飛び込みました。

銭形出馬

一

浪人加川祐三郎はまったく置き忘れられてしまいました。日本橋で逢って、いっしょに帰って来た主人の総七は、家の中へ飛び込んだきり、お染の殺害に顛倒して顔を見せず、しばらくは店先に突っ立って、騒ぎの一段落つく

のを待つばかりありません。

幸いお染の姉の、内儀のお染が先に気がつきました。身扮は至って粗末ですが、人柄の立派な中年の武家、店先に仕様こともなく立っているのです。

「ちょいと、お前さんあの方は？」

お染は総七に注意してやりました。

妹のお染が死骸になって運び込まれた中にも、お染はなんとなく確りしたところがあります。眉の青い美しい年増、気も心も万遍なく働らく、町家の女房です。先代の娘で、総七はその婿がね、まだ子もありません。

「あ、そうだ、私はお客様をおつれして来たのだよ。お染のことで、すっかり忘れていたが」

主人の総七は店先に取って返して、そんな騒ぎの中にも、一応の挨拶を交しました。

「相済みません、加川様。不意のこと、私はとりのぼせてしまいました」

「いえ、御無理もないことで、私はまた改めて参ります、お店もよく解っていることで」

加川祐三郎は帰り支度をするのです。店のありかさえ判っておれば、また出直して来てもいっこう差支えないわけですから。

「いや、それでは御案内申しあげた私の気がすみません、

何かと御相談も申しあげます、どうぞまア」

主人の総七は今更らしく言葉を尽しました。内儀のお染もそれに従います。

「では、お言葉に甘えまして」

加川祐三郎は、この騒ぎの中を振り切って帰るのも、かえって心ないわざと思われと思ったか、家の中へ通ることになりました。一別以来の話など、改めて出たわけではなく、一方は大家の主人、それに対して一方は落ちぶれ果てた浪人者、死体を挟んで向い合ったわけです。

その死骸は取って十八、なんの怨みかは知れませんが、芝居町を出て、自分の家へ帰る近路、人通りの少ないところで後ろからひと突きにやられているのです。恐らく声を立てる間もなかったでしょう。

「取りこみのところを、本当に恐れ入ります。芝居の絵看板を見ての帰り、あの辺の裏通りは寂しゅうございます。

それでも昼日中安心して通ったことと思いますが、すれ違いざま、後ろからひと突きにやられたことでございましょう」

「――」

総七は聞き集めたこと、傷口の様子などから見て、くどくど語るのはです。

「幸い田島屋の娘と知ってる者がありました。通りがかり

の方が見つけて大騒ぎになり、死骸を運び込んだときは、一刻ほど前だったそうで、これじゃ助かりようはありません、町内の外科も帰ってしまったそうで」
それは恐ろしいことでした。用水桶や塀の蔭に殺人者が、通りすがりの娘を刺して、姿を隠したとすれば、これは容易ならぬ事件です。

「御役人に届出たことでしょうかね」

加川祐三郎は言いました。

「土地の御用聞が、私どもが帰る前にいちど目を通しました」

「近ごろうわさの高い銭形平次に相談して見ちゃどうです。私も逢ったことはありませんが——」

加川祐三郎は言うのです。

二

「銭形の平次親分は私も存じております。お染の仇討ちを私からお願ひして見ましょう」

田島屋総七もその気になりました。この辺は縄張りも係りも違うので、なかなか来てくれそうもない平次は、此方から行って引張り出すほかはありません。

「それでは私が参りましょう、お手代を一人拝借して」

加川祐三郎は気軽に立ち上りました。店には番頭も手代

も小僧もおり、その中から一人借りて行くのは、いっこう差支えないことだったのです。

「それでは私がお供をいたしましたよう」

十四歳の小僧久吉が先に立ちました。

神田の明神下まで、その頃の物の考え方から言えたいした道ではありません。

「あの騒ぎの中にいるよりは、歩いた方がまぎれるだろう、お前はあの家に奉公して何年になる」

加川祐三郎は無駄話をはじめました。

「一年でございます、一昨年の春からで」

「務めは楽か」

「務めとなると、楽じゃございませんが、旦那様は優しい方で」

そう言われると内儀はきびしいようです。

「殺されたお嬢さんは十八ということであったが、年頃だな、好きな男でもなかったのか」

「いっこうに存じません」

「芝居の絵看板を見に、一人で出かけるようじゃ、あまり堅い娘とも言えまい、なにかわけがあるだろう」

「そうでしょうか」

「銭形平次のところへ行くと、そんな事もきかれるだろう、工夫があっても宜いよ、知らぬ存ぜぬでは話になるま

い」

「そうでしょうね」

「炭屋すみやという商売は客の出入りも多いことだろうから」

後世塩原太助が炭屋で一代に巨富きふを築いたこともあり、ガスも電気もない時代は炭屋はなかなか派手な商売でもあったのです。

「そう言えば、お隣の能富のふ左門次様と、よく話しておいでになりましたが」

「なんだ、それは」

「田島屋の裏に住む、裕福ゆふくな御浪人で」

「それは怪あやしいな、浪人にもいろいろある」

そういう加川祐三郎は、如才じさいない男でもあり、人柄も相当てですが、太平の世の悲しさ、いまだに抱え手がないらしく、汚きたない羽織はおりに蒼白そうはくい顔をしております。

明神下には、銭形平次がおります。御用がひまで、八五郎を相手に無駄話むだわをしている最中です。下谷と浅草と、どっちが好い娘むすめがいるかとか、上野の山から神田明神様まで、一気には駆け切れまいと言ったような、八五郎の話に相槌あきづを打つのも、あまり楽な仕事ではありません。

お静はお茶を三度かえて塩煎餅しよせんぺいのほかに、かき餅かきもちを焼きました。銭形家の蓄えたくえはそれでみんな、あとは諦あきららめて、お静は外へ出て行った様子です。干物ほものを裏返しして来よう

と思ったのでしょう。

「御免下さい、銭形平次殿は御在宿かな」

小僧をつれた武家が、つつましく門口に立っております。

「どなた様でございましょう、平次は家におりますが」

「拙者しよは加川祐三郎と申します、浅草雷門の田島屋に、不思議な殺しがあつて参りましたが」

加川祐三郎はいんぎんに申入れました。

三

平次は、その座に客を迎え入れました。相手は浪人者に違いありませんが、態度はいかにもいんぎんを極きまめます。

「その十年目で逢った田島屋さんと、いっしょに帰った矢先、大変な騒さわぎがはじまりました。田島屋さんといっしょに出たはずの、御内儀の妹御お染さんが、猿若町の顔見世芝居の絵看板えかんばんを見ての帰り、裏町へ入ると、物陰から飛び出した、怪しい者に左肩胛骨ひだりけんぱくの下を刺されてしまいました」

「何？ 田島屋のお染さんが刺された」

八五郎が一番先に乗出しました。

「御存じか」

「御存じどころの騒さわぎじゃない、あれは浅草一番の娘だ。」

大家の娘でなきや、一枚絵になって売出される玉だ」

江戸中の娘たちを心得ているのを何よりの自慢にしている八五郎です。

「——それを顔見知りの者があって田島屋に担ぎ込み、外科を呼んで手を尽しましたが、息が絶えては手の下しようありません」

「あれだけの娘なら、人様になんとか言われ、心易くした男もあるに違えねえ、親分」

八五郎は躍起となります。

「その点が気になったので、道々小僧からも訊きました。するとお隣に、裕福な浪人があって、かねてお染と懇意にしていると言うこと」

加川祐三郎は小僧の久吉の言葉まで取次ぎます。

「待ちなよ八、それほど懇意にしている男なら足音でも気がつくだろう。猿若町の裏町だぜ、隣に住んでいる者に殺されるはずもあるめえ」

「ですがね、親分。あの娘なら三人や五人の殺し手はありますよ」

「お前もその一人だろう、幸いきょうは朝からここを動かなかった、お茶を三杯も呑んだよ」

「冗談じゃねえ」

かかる中にも、平次と八五郎の話は遊びが多かったので

す。

「浅草の田島屋さんなら、私も知っていますよ、ともかく出かけましょう」

平次は気軽に御輿をあげました。そこから浅草まで、雑念に囚われるのを嫌った様子で、平次も加川祐三郎も黙ってしまいました。八五郎は小僧を相手に、いろいろの事を訊きますがいっこうに埒があきません。

ゆきつくと、江戸中の人が集まったほどの騒ぎです。遠い親類から、近所の他人まで、押し返しもならぬ人波です。お染の死骸は奥の一と間に移されて、仏様らしく整えられ、お神さんたちはさめざめと泣き合っています。

「これは、銭形の親分、よくお出で下さいました。さっそく私が参るべきでしたが——」

総七はこの中をかきわけて挨拶するのです。

「とんだことでした。さっそく取りかからして頂きますが、誰がいったいこれを見つけたの？」

平次はもう調べに入っております。裕福そうな炭屋の奥、多勢の人は固唾を呑みます。

「それは私でございました」

若い男が乗出しました。

「どこで見つけたんだ」

「猿若町の裏でございました。顔見世の看板が出て、表の

方はたいへん賑かでした、裏はひっそりとして、滅多に人影ありません。家へ帰ろうと思ってやってくると、用水桶の裏に人が倒れているじゃありませんか、引っくり返して見るまでもなく、それは此方のお嬢さんで」

与六という若い鳶の者です。

総七とお栄

一

白昼芝居町の殺し、それは前代未聞の出来事でした。銭形平次は日頃に似げなく駆けつけて、その下手人を挙げにかかったのも無理のないことです。

そのためには静かな環境と行届くだけ行届く思慮とが必要です。平次は一人一人を念入りに調べて見るほかはないと思ひました。

主人の総七は婿養子ですが、いちおうの顔見知りでもあり、平次は裏の一と間を空けて、その部屋に相對しました。三十代の物静かな町人、若くはあるが、これだけの店を背負って立つだけの貫禄は十分です。

「この殺しはむずかしい。芝居のことですから、見た人もあるでしょう、まず御主人からその時の様子を詳しく話して下さい。若いお嬢さんのことですから、いずれは色恋の沙汰でしょう」

平次の問いはこう言ったものでした。死顔で見ても、お栄は存分に美しく、たった十八で殺されたのですから、これが色恋の沙汰でなければどうかしております。

「いえ、あの娘に限って、そんな噂は毛頭ございません」

主人の総七は冒頭から否定し去るのです。

「どなたも、親兄弟はそう仰しやいますが、小娘となんとやらで、油断のならないのはこの道でございます」

平次はこんな事まで言ってみるのです。

「では、最初から申しましょう。田島屋はこれだけの炭屋を築きあげましたが、女が二人で、跡取りというものはございません、私の女房のお栄とその妹のお染でございます」

「そこで旦那が田島屋の本家から入って、跡取りになられた」

「それももう十年も前のことで、府中から江戸へ出るとき、箱根で腹痛をおこし、その時お世話になったのが、親分のところへお誘いした、加川祐三郎さまでございます」

「いかにも、そう聞くとわかります、よくある出世街道、十年目で日本橋の上で逢ったわけで」

平次は義理堅い二人に感嘆したい心持でした。その頃の旅人は、神社仏閣に矢立の墨で書きみだしたり、旅の道連れを拵えては、無闇に袖振り合うも他生の縁にしたがった

り、妙にセンチメンタルになったものでした。

「田島屋の先代は総左衛門と申しまして、私の叔父に当りますが一代にこれだけの身上を拵えあげただけにずいぶん人様にかれこれ申されました。それもこの道は別でございまして、下女のお友に手をかけて産ませたのが、あのお染でございませう、里子にやって育てて母が亡くなるとこの家に引取りましたが——」

それは町家にも稀れにはある例だったのです。田島屋総左衛門は、お染のほかにお染という隠し子があり、正妻が世にあるうちは憚って里に預けてありましたが、正妻死後は誰はばかる者もなく、実家に引取って、お染の妹分にして、他所目にはずいぶん贅沢に育てたのも無理のないことです。

「それだけに、同じ姉妹とは申しながら叔父の目からはお染が特別に見えたことも言うまでもありません、その可愛がりようは、たいしたものでもございました」

お染、お染二人の娘を遺して、父親がお染を偏愛した心持も察せられないではありません。姉のお染にはれっきとした総七という婿がある上に、田島屋ののれんをついで、いながらにして巨万の富の跡取りになれるのです。

二

「ところが、不思議なことがございます」

総七は言葉を切りました。このことは言って宜いか悪い、ひどく迷っている様子です。

「不思議なことを仰しやるのは？」

「先代の総左衛門はたいした辛抱人でございました。一代に積んだ金は何千両とも勘定しきれませんが、死んだとき——八年も前、中風で臥っけていて、不意に亡くなりました。医者に言わせると卒中だということでした」

「——」

「あまりに不意のことで、こっちにも支度はなく、亡くなった当人も、なんの用意もなかったことと存じますが、亡くなった後で家財道具から、貸金まで調べましたところ、夥しい家作、貸金から、土地貸金はありましたが、現金と申すのは、当座の入用に当てる五、六十両だけ、どこをさがしても一兩の貯えもない有様でございました」

「なるほど——」

「親類一同は申すまでもなく、番頭手代にまで申しきかせ、家の中を手の及ぶかぎり調べましたが、どこへ隠したか出てくる当てもありません。商売の様子から見ても三千両や五千両はあったことと存じますが、ないものは致し方もなく、それなりに跡の始末をして、それからざっと八年も経ちます。幸いにして田島屋の信用は貧乏揺ぎもせず、そ